

悲しみは

松花江に流して

看護婦たちがみた二つの戦争

大原榎子

大原 槇子(おおはら まきこ)

北海道旭川市に生まれる

北海道大学水産学部水産動物学講座卒業

現在 旭川大学高等学校教諭(理科担当)

同高校新聞局顧問

北海道高校新聞教育研究会理事

悲しみは松花江に流して

定価1500円

1987年7月20日 初版発行

1987年9月10日 2刷発行

著 者 大原 槇子©

発行人 鈴木 好晴

印刷人 内藤 文夫

発行所 図書出版 にじ書房

東京都文京区本郷 2-30-14 文京第2ビル

電話 03-812-4383 振替 東京 9-181495

印刷・東銀座印刷 製本・石津製本

ISBN 4-924776-01-7 C 0036

悲しみは

松花江に流して

大原槿子

看護婦たちがみた二つの戦争

にじ書房

〈事実〉を克明に追った感動の書／序にかえて

札幌学院大学人文学部講師 武石 文人

(前北海道高文連新聞部専門委員長)

大原槇子さんは、北海道旭川市の旭川大学高校の理科教師である。また主婦であり、二児の母親でもある。と同時に高校新聞活動のすぐれた指導者の一人でもある。実に一人四役でそれだけでも並大抵のことではない。その大原先生が、このようにすばらしいノンフィクションを書いていたのだから、もう驚きというよりただ敬服するしかない。

私と大原先生との出会いは「高校新聞」を通してであり、話を交わすようになってからまだ日は浅い。それでいてかなり以前からお付き合いをいただいていたようにも思われるのだから不思議である。七年ほど前、洞爺湖畔で開かれた全道高校新聞研究会の顧問研修会の時だったと思う。約百校、六百人の生徒たちがいろいろなテーマの分科会に参加している間に、顧問教師も日常の新聞指導のさまざまな悩みや経験など出し合っていた。司会を仰せ付かっていた私の目に、ふと熱心にメモをとっている若く美しい女教師の姿が映ったのである。新聞部顧問は多くの部活指導の中でもっとも敬遠される仕事で、とかく学校側と生徒たちとの板挟みになることが多いのだ。したがって顧

問教師の多くは良い意味で一癖も二癖もある男性の一言居士が多いのである。その中で大原先生は珍しく、目立つ存在だった。しかしお名前はおろか勤務校も分からないまま数年が過ぎた。一方、私はこの十数年、「全道高校新聞コンクール」の審査にもかかわっていたが、編集技術も泥くさく、文章や見出しも決して上手とはいえないものの、紙面の背後に何か気魄をひめている感じの「旭川大学高校新聞」に注目していた。やがて審査会でも好評を得て入賞するようになり、はじめて顧問がああ熱心な女教師であることを知って、さすが、と思ったのを覚えていた。

昨年の秋、ふとしたきっかけから大原先生のこの『悲しみは松花江に流して』の原稿を読ませていただく機会を得たのであるが、躰が震えるようなショックと感動をおさえることができなかった。三人の看護婦が中国大陸で迎った凄まじいまでの数々の体験と数奇な運命。戦争に協力させられ、翻弄された苛酷な青春——その内容もさることながら、長い年月をかけてそれらの「事実」を克明に追った大原先生の姿勢と努力にあらためて感動し、深い敬意を覚えたのである。

新聞指導で最も大切なことは「事実」に肉迫する姿勢を育てることにあると思う。大原先生のこの著書は全国の高校新聞編集者たちにとって最良の指針となるだろう。また憲法施行四十年を迎え、戦争体験が風化する中で再びキナ臭い動きが増えつつある今日、本書のもつ意義は極めて大きい。

新聞指導の合間には生徒と共に天体観測をするという大原先生の汗の結晶が上梓されることを心から祝福するとともに、歴史に学ぶ心をもつ多くの人々に迎えられることを切望してやまない。

悲しみは松花江に流して——看護婦たちがみた、二つの戦争、

目次

〈事実〉を克明に追った感動の書／序にかえて 3

プロローグ 9

第1章 敗戦前後 17

1 かわいそうな兵隊たち 18

2 平家の都落ちのように 38

3 狼の吠える荒野をさまよって 49

第2章 大陸の冬 59

1 哈爾濱の中央閣 60

2 屍の山 63

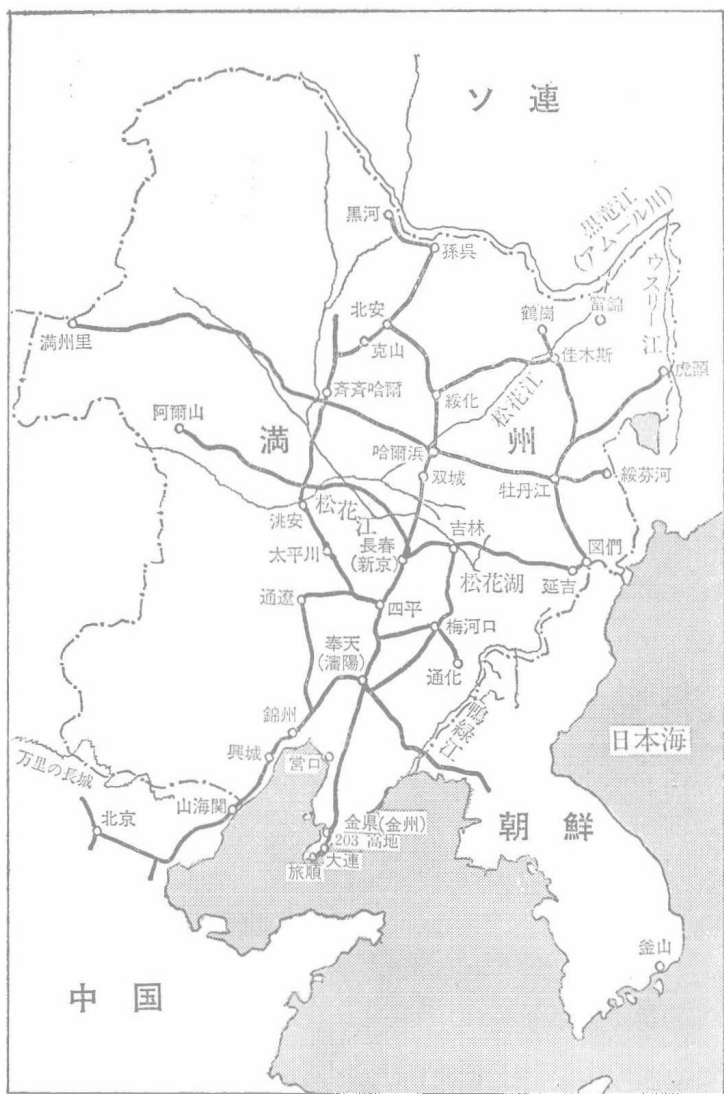
3 武装解除 75

4 ソ満国境の放浪 90

第3章 八路軍従軍 103

1 克山での出会い——幸と喜久恵 104

2	富錦での出会い——幸・喜久恵・操、三人の合流	112
3	八路軍従軍	127
4	すさまじき傷病兵たち	136
5	訴苦坦白運動——女と子どもの地獄	142
6	食物	152
7	虫——シラミ・ハエ・南京虫・蚊・サソリ	158
8	東北解放、そして全土解放	161
9	朝鮮戦争の前後	167
	エピソード	183
	あとがき	193



中国東北部(旧満州)

プロローグ

うれしい再会

山崎幸は、生後三カ月に満たない男の赤ん坊を抱いて、中国四川省の成都から江蘇省の上海へと出てきた。成都から西安、西安から洛陽、鄭州、そして南京、上海へと、汽車や飛行機を乗り継いで長い時間がかかった。飛行機は西安ともう一個所（地名がはっきりわからない）で乗りかえた。他の人より恵まれていたと思うのは、飛行機に乗れたことで、汽車だけならもっと何日もかかったと思われる道のりであった。

一九五八（昭和三三）年七月、上海港に停泊している引き揚げ船、白山丸に乗り込んだ人たちは、幸の記憶ではおよそ二〇〇〇人だった。船上や船内では、あちらこちらでお互いをなつかしみあう人びとの「かたまり」ができた。

幸もなつかしい人たちに出会った。肥後喜久恵と東操（仮名）である。

操は、生後四カ月だという女の赤ん坊を抱いていた。彼女はこの一年間、上海にいたという。そして喜久恵は、妊娠七カ月の身重だった。この日までの一年間は、成都にいたとのことだ。

三人は一九歳あるいは二〇歳のとき、中国大陸の東北部（当時日本は満州と呼んだ）に渡った。それから実に一四年の歳月が過ぎた。白山丸で会ったとき、幸と操は二三歳、喜久恵は三五歳になっていた。十年ひと昔というから、ひと昔半を異国で生きたことになる。戦時の渡満から一年と少々、あ

るいは一年たたないうちに迎えた敗戦。そしてその後の中国内戦のさなかを生き抜き、新しい中国の成立をかいま見てきた。

生まれ故郷は、幸が福島、喜久恵が長野、操が茨城と、それぞれに異なり、中国大陆にも別々に渡ったが、彼女たちは、中国の内戦の渦中で出会った。

白山丸は港を離れ、一路日本へと向かい始めた。長い間離れていた故郷へ帰るのは、胸が高鳴るような気分だった。しかし彼女たちには、単純に喜んでもいられない不安も同居していた。十数年も離れていた故郷に帰ることへの不安である。

（家はもとのままにあるだろうか）

（帰ったときに、家族や親戚に違和感なく迎えられるだろうか）

（日本に帰ってから、生まれたばかりの子どもをちゃんと育てられるだろうか）

それぞれの胸中には、さまざまな心配が混在していた。妊娠七カ月の身重の喜久恵は、また別のことを考えていた。彼女は帰国の途につく前に、気のつく限りの準備をしてきた。生まれてくる子どものために、真っ白いネルの布で一つ身の産衣うぶぎと襦袢じゆばんを縫って持ってきた。七カ月の身重だけでも、もしも長旅の途中で早産でもしたら、そしてその子が育たなかったなら、産衣を着せてやり水葬にする覚悟までしていたのである。

それにしてもうれしい再会であった。三人とも夫と子どもがいて、あるいは間もなく生まれるはずの子どもがいて、生きて帰ることができる。大きな幸福に違いなかった。船内では、幸の赤ん坊に、喜久恵がズボンをほどいて負紐おひもを縫ってやったりした。戦争の時代を生きのびた三人は、お互いに赤ん坊をいたわり合って船旅を過ごすことになった。船旅の三日間あまりは今までの人生をふりかえる貴重な時間となった。

とり残された人びと

三人の中で最も早く渡満したのは喜久恵で、一九四四（昭和一九）年三月だった。日本赤十字社の従軍看護婦としてである。

操は、女子挺身隊ていしんたいの一員として同年五月ごろに、ソ連と中国の国境に近いある村に渡った。黒竜江省ホロングシヤウのある村であった。

また幸が陸軍看護婦として単身渡満したのは、一九四四年の一〇月末だった。最初に配属されたのは、遼寧省リャウニョウシヤウの金県キンケン（金州キンシュウ）陸軍病院である。

ところが間もなく敗戦になった。

中国にいた日本人の中には、一九四五（昭和二〇）年八月一五日以前に、戦況の微妙な変化を感じている者もいて、いち早く中国から脱出し日本に戻った軍人が存在したという。しかし多くの日

本人は、敗戦後もそのまま中国にとり残された。幸、喜久恵、操は、そうした多くの「とり残された人びと」の中の三人だった。日中戦争終結後の混乱期に味わった経験は「いま、生きているのが不思議」とさえ思うことばかりだった。何度も生命の危機にあいながらも、彼女たちは生きのびた。そして敗戦から約一年後に、中国東北部のソ連国境に近い町、富錦^{フキヤン}で出会った。それが三人の最初の出会いだった。

日本での生まれ育った土地が異なる三人が出会った町、富錦には、大河、松花江^{ショウカコウ}（スンガリー）が流れていた。ここをソ連船が往来し、中国との間で物々交換などの交流があった。

さて、三人はどのような出会いをしたのか。

喜久恵がまず敗戦直後に、中国の八路軍^{ハチロウ}によって武装解除された。「天皇の股肱^{ここう}、皇后の赤子^{せきし}としてお国のために戦い死ね」という教育を徹底して受けた彼女は、納得のいかぬまま、八路軍に必要とされ、そこで仕事をするようになった。

幸は、戦後難民となった軍人家族や、なんらかの理由で中国に渡り生活していた人たち、開拓団の生き残りの人たちとともに、一冬をハルビン^{ハルビン}で生きのびたところを、八路軍に拾われた。八路軍では、外科の看護婦を必要としていた。若い軍医である王群^{ワングン}は、幸に「ぜひ力を貸してほしい」と強^{ツヨク}くたのんだ。熱意に負けてほんの二、三カ月のつもりで彼女は王とともに仕事をするようになった。そして操は、女子挺身隊員として入った中国東北の辺境の土地の、ある開拓団から一年近い逃亡

の日々を過ごし、すっかりやつれた状態で、幸や喜久恵と合流した。彼女のいた開拓団は、敗戦の二、三日前に立ち退きを命ぜられた。そしてなぜか理由のわからないうちに、何者かの襲撃にあって、同じ部落の人たちは殺されてしまった。逃げのびた彼女と数人の女たちは、その後もさまざまな目にあったのである。

八路軍との出会いは、操にとっては、地獄で仏に会ったように、ありがたいものだった。彼女は、元氣いっぱい働いている幸たちを見て、本当になんといあらわしてよいのかわからないほどの安堵感をおぼえた。それまでに味わってきた非人間的な恐ろしい生活から、衣食住が保障される生活に大転換したのである。自分が必要とされる仕事があり、生命の危険からも、少し遠のいたような気がした。そして何よりも安心したのは女性である、ことを恨まなくてもよくなったことだ。

松花江の流れる町、富錦での出会いから、三人は、それぞれに持ち場こそ違うが、みな八路軍に必要とされ、その管轄下の病院で働くことになった。こうして三人は、戦況の変化で、別れと再会を何度もくりかえしながらも、自らが内戦の一方の側で仕事をしながら、中国が歴史的に大きな変化を遂げていくのを目のあたりにしたのである。

白山丸の船内での数日間は、いままでのことをふりかえる時間であった。そしてまた、日本に帰ってからの生活を思いやる貴重なひとときでもあった。

中国では何度の出会いと別れがあったか。

正確には思い出せないが、生きること追われていた日々の中では、一回ごとの出会いや別れに、さほどの感激はなかった。でもいまは三人が同じ船に乗り合わせ、故郷の日本に帰るところだ。日本に帰ることができるというのは、やはり何と大きな喜びであることか。一四年ぶりの日本である。

白山丸は七月一三日に舞鶴港に無事入港した。迎えの人たちのなつかしい顔があった。

「みんな元気だね」

お互いに声をかけ合って三人は船から降りた。

これから記すのは、彼女たち三人が経験した「戦争の時代」の記録であり、同時に中国にとどまったために奇しくも経験できた、新中国に「移り変わる時代」の記録でもある。